

〈実践報告〉

NPO 法人 DAREDEMO HERO のスタディツアーへの参加の意義

—海外研修Cの一環として—

竹下 裕子

要旨

国際コミュニケーション学科の海外研修Cの一部であるフィリピン・セブ島のNPO法人における参加学生の活動を通じて、彼女たちが日本では遭遇したことのなかったような境遇にある子どもたちとの交流の機会を持った。このことは、この科目の大きな部分である英語運用能力の向上と世界の多様な英語への理解とは異なる教育的効果を上げたと考える。すなわち、学生は、これまで目にしたことのなかった貧困を目撃し、貧困すなわち不幸ではないかもしれないという疑問を持ち、活動を通じて知ることの重要性を認識した。この経験が、将来、国内外で学生たちが関わることになるであろう多様性への理解や対処法の習得にもつながる可能性に期待したい。

キーワード：海外研修C、NPO法人 DAREDEMO HERO、スタディツアー、英語、多様性のマネジメント

はじめに

東洋英和女学院大学国際社会学部国際コミュニケーション学科の学科専門科目のうち、留学関連科目群に含まれる海外研修Cは、中学校教諭一種（英語）および高等学校教諭一種（英語）免許の取得をめざす学生のために、大学が独自に設定した科目のひとつである。2022年度海外研修Cには、国際コミュニケーション学科と国際社会学部に所属し、将来、中等教育機関の教員となることをめざす学生を含む6名が参加した。この学生らの経験を通じて、フィリピン・セブ島で実施したこの科目の研修の意義を、特にNPO法人の協力のもとに実施したボランティア活動に焦点を当てて検証したい。

I. 授業の概要

海外研修Cは、通常、半期15回の授業を持って完結すべき科目を、国内9回の対面授業とフィリピン・セブ島における7泊8日の現地研修で構成する。つまり、現地で活動することが主な目的というよりも、国内における学びの延長線上に現地研修がある。国内の事前学習と現地の研修内容との有意義な関連付けがこの科目の学びの重要な要素を構成する。

授業の主なテーマは、世界諸英語（world Englishes）、および英語を用いた異文化間コミュニケーションに関心をもち、教養ある日本人として英語運用能力を活用して多様な人々とコミュニケーションを図ることを将来的な目的として、自身のスキルを磨くだけでなく、世界諸英語の諸相とその使用状況を理論的にも追究することであった。具体的にはフィリピンを例にとり、世界諸英語のひとつであるフィリピン英語を理解し、フィリピンの英語教育事情や使用状況を考察し、日本の英語教育と日本人の英語使用と比較することにより、アジアにおける英語の意義や役割を考えることを目指していた。

到達目標は、世界諸英語やそれを用いる多様な人々に対する理解を深め、それらに対する違和感や苦手意識、さらには偏見を持つことなく、英語の母語話者および非母語話者との英語を用いた異文化間コミュニケーションに高い関心と意欲、そして自信を持ってこれを実践するようになることであった。さらに、世界諸英語の視点から、日本人の英語を客観的に考察し、日本人英語のユーザーとしての自覚を持ち、日本人がどのようにしてよりよい英語を用いた異文化間コミュニケーションを実践するべきであるかということに考えをめぐらせること、そして今後の日本の英語

教育や英語使用に対する提案ができるようになることも目指した。フィリピンはこの目標達成のための一例である。具体的には、フィリピンの言語政策や英語教育と英語使用に関する知識を持ち、フィリピン人との英語によるコミュニケーションを含む実践的な体験も経て、この目標の達成を目指した。

フィリピン研修前の9回の授業では、フィリピン英語や言語政策に関する文献を読み、講義を聞き、テーマを決めてグループ作業による調査研究を経て、世界諸英語の中のフィリピン英語と日本英語を考える機会を持つ。国際社会学部では、1年次の基礎英語の一部としてQQ English^{註1)}が提供するオンラインレッスンを導入しているが、同社の日本オフィスが派遣する特別講師のご協力を得て、フィリピン事情やフィリピン人による日本人に対する英語指導の現状への理解を深める。また実際にSDGsをテーマとするオンライン授業も体験受講する。

フィリピン研修では、セブ島のQQ Englishに滞在しながら、SDGsトピックカンパシーションのレッスンを受講(最大1日50分×6コマ×5日)、QQ English代表者との懇談、フィリピン人英語教員との懇談、教員や現地住民を対象とした対話とインタビュー調査、フィリピン人教員のための教員研修への参加、そして現地NPO法人 DAREDEMO HERO主催のスタディツアーへの参加を主な活動内容とした。

以上の概要で明らかなおとおり、本論が焦点を当てる、NPO法人DAREDEMO HERO主催のスタディツアー、すなわちボランティア活動への参加は、現地研修のうちのほんの一部でしかない。けれども、この活動への参加が学生たちに大きな学びの機会となり、海外研修Cが目指した目標到達への重要な要因となったため、その部分に焦点を当てた実地報告を行う。

II. NPO 法人 DAREDEMO HERO

NPO法人DAREDEMO HEROは、主たる事務所を兵庫県西宮市に置き、フィリピン・セブ島で活動する団体である。“Everybody can be a hero.”を標語に掲げ、「すべての子どもたちが夢と希望を持ち、努力が正当に報われる社会を実現する」ことを使命とし、貧困問題を根本的に解決することをめざし、①奨学生に対する支援、②地域支援、③文化交流を活動の3本柱としている。

奨学生に対する支援は、奨学金の支給、生活費の支給、昼食支援、そして学習支援に渡る。奨学金支援として、具体的には、大学卒業までの学費、制服代、教材費を支給している。生活費の支援は、奨学生が健康で勉学に集中できるためのものであり、特に昼食支援では、食費ではなくて栄養バランスのよい食事を提供している。さらに奨学生の学習のサポートは、教員資格を持ったスタッフが担当している。

奨学生は、小学3年生から大学生までの子どもたちである。学びへの動機が高いにも関わらず、貧困により学習の継続が困難な子どもたちのうち、学校推薦を得て、書類選考に合格し、親子面接と家庭訪問による調査に合格した少数の子どもたちだけが、フィリピンの貧困問題の解決に取り組むためのリーダーとなることを目標とした包括的な支援を受けている。

地域支援は、最も貧困問題が深刻な5つの地区に対して実施している。一つ目のイナヤワン地区は、セブ市内のごみが集められる場所で、ごみ拾いで生計を立てる人々が暮らしている。二つ目のカレタ墓地には、墓参客に花やローソクを売ったり、墓石を掘ったり、墓を管理して生計を立てている人々が住みついている。三つ目のブロック47は、各地から火災被災者が集まって長年テント生活を続けているような地区である。四つ目のソオン地区はマクタン島の中のごみの山がある場所で、最後のタップタップ地区はセブ島の山岳貧困農村地区である。台風などの自然災害や天災、そしてコロナのような疫病により生活が困難になった最貧困層に対する食事や生活必需品の提供も、地域支援の一環である。加えて、人々が生活力を付けて自立することができるように、貧困層の実態調査に基づくコミュニティー主体の栄養改善事業、子どもたちの口腔衛生改善プロジェクト、セブ島貧困層のライフスキル向上事業、女性の権利と健康衛生の向上事業、スーパー台風からの農業再建支援事業などを通じた自立支援も行っている。

最後の柱の文化交流は、具体的には、日本からのボランティアを受け入れ、フィリピンの人たちとの交流を促進することである。3か月以上の滞在者はインターンとして活動することができ、短期の滞在者はボランティアとして、常駐している日本人とフィリピン人のスタッフの活動を支援することができる。

Ⅲ. NPO 法人 DAREDEMO HERO における学生の活動

NPO 法人 DAREDEMO HERO の内山順子理事長と海外研修 C 担当者は、事前の綿密な打ち合わせを経て、学生のボランティア活動当日を迎えた。当日は次のとおりの予定を組み、活動が進行した。一連の活動のうち、カレタ墓地におけるボランティア活動と NPO 法人 DAREDEMO HERO タランバン事務所における奨学生に対するプレゼンテーションと交流に関する詳細をまとめることとする。

- 9:00 宿泊施設にて内山理事長によるオリエンテーション、スタディツアー参加同意書署名
- 10:00 宿泊施設出発
- 10:30 カレタ墓地到着、子どもたちのためのボランティア活動と交流
- 11:30 カレタ墓地からレストランに移動
- 12:00 昼食
- 13:00 NPO 法人 DAREDEMO HERO タランバン事務所到着
奨学生に対する授業の実施と交流
- 14:30 終了・タランバン事務所出発
- 15:00 宿泊施設到着、振り返り
- 15:30 終了

1. カレタ墓地におけるボランティア活動

カレタ墓地は、セブ市最大の公営墓地で、文字どおり死者が土葬されている。富裕層の棺は、屋根や壁で守られているため、貧困層の人々はこれを「管理する」ことを仕事としながら、ここを住みかとして、棺を寝床やテーブル代わりに利用しながら生活をしている。ただし、本来、生活の場ではないため、電気や水道は引かれておらず、トイレの完備もない。NPO 法人 DAREDEMO HERO は、墓地で暮らす子どもたちが学ぶことができるように、2021 年、墓地の一角を利用してラーニングセンターを開設し、これを運営している。学生たちは、墓地の入り口で車を降り、そこに暮らす人々の生活を目にしながら、子どもたちが集まっているラーニングセンターまで歩いて行った。

カレタ墓地における学生の活動の前半は、ラーニングセンターで待っていた子どもたちと遊びを通じて触れ合うことであった。ボール遊びや縄跳び、鬼ごっこなど、しかけは DAREDEMO HERO のスタッフによるものであったが、学生たちは暑さの中、子どもたちと汗を流し、交流を楽しんでいた。墓地の子どもたちは英語を話すことができないため、会話を通じた交流は叶わなかったが、それでも体を動かす時間を共有することにより、現地の特殊な環境に置かれた子どもたちとの交流という貴重な体験をした。

活動の後半は食事の提供であった。通常は葬儀のために墓地に持ち込まれたスナック菓子の余りをもらって口になっているような子どもたちに対して、DAREDEMO HERO は巨釜で調理した雑炊を車で墓地に運び込み、少しでも栄養バランスの取れた食事を提供するという目的で、子どもたち一人一人に配っている。学生は雑炊を紙コップによそい、スプーンと一緒に子どもたちに配る役目を担当し、さらに自分たちもこの食事を子どもたちと共にした。

カレタ墓地の
子どもたちの
交流（遊び）



カレタ墓地の
子どもたちの
交流（食事）



2. NPO 法人 DAREDEMO HERO の奨学生との交流

カレタ墓地からタランバン事務所の HERO'S HOUSE に移動後、授業のために集まっていた 40 名ほどの奨学生らと学生たちが対面した。奨学生の自己紹介は日本語によるもので、日本人スタッフによる指導のもと、かなりの練習を積んだことが推測された。皆、奨学生として学んだのちの将来の夢や目指したい職業について語ってくれた。

本学の学生からは、ことわざで日本文化を英語で紹介するというテーマのもと、準備をしてきた内容を、パワーポイントファイルを使用して披露した。題材としたことわざは次のとおり、それぞれ 5 分程度にまとめたプレゼンテーションであった。

- 「二兎を追う者は一兎も得ず」

(Those who chase two rabbits will not catch even one.)

- 「十人十色」

(So many men, so many minds.)

- 「千里の道も一歩から」

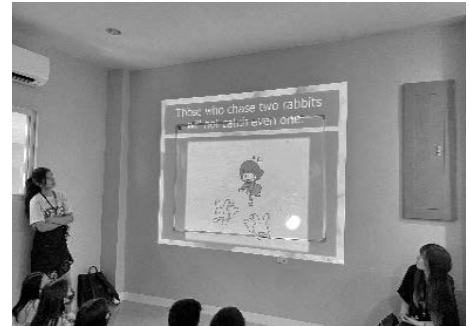
(The journey of a thousand miles begins with a single step.)

- 「笑う門には福来る」

(Fortune comes in by a merry gate.)

ことわざを通じた日本文化に関するプレゼンテーションののちには、奨学生のリーダーが中心となり、いくつかのグループに分かれて交流をした。円陣を組んだおしゃべり、カードゲーム、カルタなど、主導権が奨学生に移動し、英語によるコミュニケーションを含め、楽しい時間をすごした。

最後に、奨学生とは分かれた別室において、内山理事長を中心とした振り返りの時間を持った。オリエンテーションからスタートし、カレタ墓地の子どもたちとの出会い、そして奨学生たちとの交流を通じて、各学生が感じたことをしっかりとことばにすることが目的であった。学生たちはきちんと考え、思いを理事長にお伝えし、適切なフィードバックを得ることにより、この日の驚きや感動が消えてしまわないうちに経験を見つめなおし、整理をすることができたため、非常に有意義な振り返りの時間であった。



奨学生たちとの交流（授業）



奨学生たちとの交流（ゲーム）

IV. 学生たちの記録とそこから見えてくること

1. 学生による記録

学生は、科目担当者の指示により、フィリピン滞在中の毎日の活動の記録を提出していた。スタディツアー参加日以外の日の記録は割愛し、ツアー当日の記録のみ、提示する。

設問. 9時からの内山さんのオリエンテーション→カレタ墓地の子どもたちとの交流→ジョリビーの昼食→タランバン事務所の奨学生に対するプレゼンテーション→その後の子どもたちとの交流 という貴重な経験をした 1 日でした。自由記述にしますので、体験したことやそこから感じたこと・考えたことをたくさん記録してください。

学生 1. カレタ墓地やプレゼンテーションまで経験して、相手の立場になって考えてみたり、何ができるのか考えたりしました。もう 2 度とない貴重な体験を経験をし、日本に帰国した後、どんなことができるのか、SDGs の目標や貧困層の解決、フィリピンの生活水準を向上することがどんなに困難なのかを実感できました。

学生 2. 今までそのような状況下で暮らしている子ども達に会ったことがなかったため、忘れられない経験になりました。最初のオリエンテーションの笑顔の輪の話が印象的で、どんな状況下でも笑顔でいる大切さを実際に子ども達と触れ合うことで感じました。ただ社会問題を聞いて鵜呑みにするより、実際に自分の目で確かめることが重要だと思います。

- 学生3. 貧しい子どもたちに対して「かわいそう」と思ったり「悲しい」と感じている私たちの印象が覆されるような内容でした。子ども達の笑顔を見たり、子ども達の夢を聞いてみると貧しいとは思えないくらい幸せに暮らし、努力していることを実際に見て学ぶことができました。子ども達がきちんと教育を受けて、将来大人になって自分にとって正しい選択ができるように、立派な人間になれるように願っています。子どもたちの成長が楽しみです。
- 学生4. 今回の体験では、笑顔の連鎖についてとても印象に残りました。可哀想だから助けてあげたいという思いで参加しましたが、実際に参加してみると、子どもたちはとても笑顔で、不幸で可哀想な子たちとは全く感じませんでした。むしろ、私が子どもたちからたくさん笑顔をもらい、幸せな気持ちになりました。笑顔の連鎖は言葉が通じなくても起こるものだということを実感することができ、とても貴重な経験になりました。また、授業をした子どもたちは、家族を守りたいという思いで医者や、弁護士、看護師になりたいと言っていました。人のために何かをしてあげたいと思う気持ちにとっても感銘を受けました。フィリピンの方々はとても明るい印象です。その一方で、その明るさで楽観的になり、向上心に欠けているということも感じました。そこを現地の人たちが自分たちで変わろうと思ってくれたら嬉しいです。
- 学生5. 行く前は、お墓で暮らす人々というワードから少し恐怖を感じていました。しかし、そこにいたのはもらった物を他の人にも分け与え、小さな・弱い立場のものには優しく、常に笑顔で駆け回っている子どもたちがいました。子どもたちと居るとそこが墓地だということを忘れるほどでした。行く前は食べ物に困っているのだらうと勝手に思い込んでいましたが、DAREDEMO HERO さんの支援のおかげか、その日は食べ物に困っている様子はありませんでした。遊んだだけなので、遊び道具不足が1番目立つように見えたのですが、このように実際の目で見なければその土地に何が不足しているのか分からないのだということを経験されました。また、給仕の時に火傷をしてしまったのですが、冷やす為の水がすぐそこになく、氷もすぐに手に入らない、自分の住んでいる国の当たり前がある地域では当たり前では無いということを経験しました。
- 学生6. この一日で2度とできないような体験をさせていただきました。最後の振り返りでも述べたように、日本人が貧困層の子どもたちに対して「かわいそう」と言うのは間違っていると改めて思いました。確かに、日本人の生活の質とフィリピン人の生活の質は全く違うので、日本人がフィリピン人の人たちに対してかわいそうと思ってしまうのも正直なところわからなくはないと思います。しかし、カレタ墓地の人々と交流をして、彼らは彼らなりの幸せを持っていて今を生きていることを実感しました。彼らは、自分たちのことを可哀想とは思っていないし、不幸だと思っていないと思います。だからこそ、私たちが彼らたちのことをかわいそうや不幸であるという権利はないと感じました。また、この経験から、実際に現地に行って人々と触れ合うことの大切さも感じました。この一日の体験以前であっても、日本にいた時とフィリピンに着いた時のフィリピンに対しての印象は全然違うものでした。さらに、今回の体験を通して、厳しい生活で苦しい思いをしているのかと思えば、私たちよりも元気で笑顔がいっぱいで、想像とは全くの別物でした。この経験を通して、外から想像するだけでなく実際に行動して自分の意見を持ったり感じたりすることが重要だと感じました。

2. 記録、そして研修後のディスカッションから見えてくること

上記の学生による記録、およびそれをもとにして振り返りのためのディスカッションを通じて学生が表明した内容を集約する。海外研修Cにおけるフィリピン出発前の国内授業でもそうであったように、スタディツアーの内容はボランティア活動とも表現していたため、当初、「恵まれないフィリピン子どもたちにボランティアとして手を差し伸べてあげる」という学生たちの印象があったことは明らかである。スタディツアー当日の内山代表によるオリエンテーションでも示唆されたことであったが、交流対象の子どもたちは概して明るく、特に奨学生は強い動機を持ち、貧しさゆえの「悲惨さ」を前面に感じさせるわけではない。学生たちは実際に子どもたちに接してこのことを実感しただけでなく、多くが言及しているとおり、子どもたちは果たして「不幸でかわいそう」な人々なのかという疑問を

抱くに至った。そして、日本人として当然であると考えていた「恵まれた生活の水準」が当てはまらないのではないかと懸念を持つ学生もいた。

学生たちは、墓地の子どもたちと HERO'S HOUSE の奨学生たちとの交流を、日本国内では経験することのできない非常に貴重な体験であると感じ、机上の学びだけではなく実際に目で見て感じて確認することの大切さを実感した。自分たちとは異なる社会や文化の中で生活する人々との接点から、事前に読み聞きしていたことの確認や知識と理解の修正、そして何よりも現地の人々と同じ空間で行動を共にしたことから得る充足感を得た学生もいた。

一方、学生の記録や話からあまり引き出せなかったことは、墓地の低年齢の子どもたちは別として、奨学生が非常に巧みにことばを使ったコミュニケーションができていたという事実であった。HERO'S HOUSE の奨学生は、まず、日本語を使って自分のことを発信することができたが、日本語による双方向のコミュニケーションができるほどの日本運用能力を備えてはいなかったため、学生との交流には英語を使用した。特に奨学生のリーダー（大学生）は、ほぼ不自由なく英語を使い、後輩の奨学生たちに対してはより分かりやすくかみ砕いた英語の表現を工夫することができただけの英語力を備えていた。このことが、学生たちの記録に記されていなかった理由を後日たずねたところ、それ以外の部分に大きく気を取られていたと答えた学生と、大学入学直後から QQ English の教員から英語の指導を受け、フィリピン人は英語が上手であるという先入観があったため、奨学生の英語が特に新鮮な驚きとは感じられなかったという二種類の回答が得られた。

V. 海外研修Cにおけるスタディツアーへの参加の意味

本稿で焦点を当てたNPO法人によるスタディツアーへの参加が、海外研修Cの中心ではなかったことには繰り返し言及してきた。そうではあっても、スタディツアーの体験は学生に強烈な印象を与え、恐らく人生初めての体験をしたと述べた学生が多かった。よって、科目全体の内容や目標を明らかにし、その中のスタディツアーが果たす役割を明確にするために、シラバスの抜粋を提示する。

学生が事前に了解していた海外研修Cの内容は次のとおりであった¹⁾。

テーマ・内容 世界諸英語 (world Englishes)、および英語を用いた異文化間コミュニケーションに関心を持ち、教養ある日本人として英語運用能力を活用して多様な人々とコミュニケーションを図ることを将来的な目的として、自身のスキルを磨くだけでなく、世界諸英語の諸相とその使用状況を理論的にも追究します。具体的にはフィリピンを例にとり、フィリピン英語を理解し、フィリピンの英語教育事情や使用状況を考察し、日本の英語教育と日本人の英語使用と比較することにより、アジアにおける英語の意義や役割を考えます。

到達目標 世界諸英語やそれを用いる多様な人々に対する理解を深め、それらに対する違和感や苦手意識、さらには偏見を持つことなく、英語の母語話者および非母語話者との英語を用いた異文化間コミュニケーションに高い関心と意欲、そして自信を持ってこれを実践するようになることを目指します。さらに、世界諸英語の視点から、日本人の英語を客観的に考察し、日本人英語のユーザーとしての自覚を持ち、日本人がどのようにしてよりよい英語を用いた異文化間コミュニケーションを実践すべきであるかということに考えをめぐらせること、そして今後の日本の英語教育や英語使用に対する提案ができるようになることも目指します。実際にはフィリピンを例にとり、フィリピンの言語政策や英語教育と英語使用に関する知識を持ち、フィリピン人との英語によるコミュニケーションを含む実践的な体験も経て、この目標の達成を目指します。

履修者への要望 この科目は、中学校教諭1種（英語）・高等学校教諭1種（英語）免許課程科目（国際コミュニケーション学科適用）のうちの「大学が独自に設定する科目」の一つに指定されているため、英語教員を目指す学生を意識しています。ただし、それ以外の学生が履修すると不利になることも一切ありません。いずれにせよ、教養ある日本人として英語を使うことに強い関心を持つ学生を歓迎します。そして単に英語運用能力の向上を目指すのではなく、英語を用いて異文化・多文化を理解し、吸収

することを旨とし、英語を用いた日本からの発信の重要性を認識し、これを実践し、日本にも、日本以外の国々にも貢献したいと考えている学生を歓迎します。

学生はスタディツアー参加以前に、複数・多数のフィリピン人との接点を持ち、英語でコミュニケーションを図る機会をたくさん経験していたため、スタディツアーの参加中に英語でコミュニケーションを図ることが主な目的となることはなかった。具体的には、学生たちは毎日、5～6人のフィリピン人英語教員と一対一の対面形式で授業を受けただけでなく、食堂のスタッフ、必要に応じて保健室の保健師、用務員などと宿泊施設内で英語によるコミュニケーションを図り、加えて、科目担当者が課した一般市民との会話を通じて、フィリピン人と英語で話すという活動はふんだんに実施した。

一方、スタディツアー参加当日、学生が英語で話した相手は、昼食をとるために立ち寄ったファーストフードのカウンターで対応したスタッフと、HERO'S HOUSEの奨学生のみだったと思われる。食事の提供などを通じて交流したカレタ墓地の子どもたちとその家族に英語の話者はいなかった。よって、海外研修C全体のテーマであった英語運用能力の活用は、スタディツアー中にはさほど活発ではなかったといえることができる。ただし、「フィリピン人は子どもの頃から英語教育を受け、英語活動を活発に行っているため、学生たちが大学の正規授業において指導を受けることができるような優秀な英語のユーザーになる」という認識があったとすると、カレタ墓地で出会ったような、十分に教育を受けることができない子どもたちがいること、そしてHERO'S HOUSEで出会った奨学生のように特別な教育等支援を受けることができなければ、中等教育や高等教育も受けられず、コミュニケーション言語としての英語を身に着ける機会がないということ、さらに言えば、国の公用語が英語であったとしても²⁾、それは公式な教育制度のもとで身につくものであり、日常生活において自然に獲得する言語運用能力ではないということなどを認識するに至る現状を目撃したと言える。

このことは、科目の到達目標として掲げた「世界諸英語やそれを用いる多様な人々に対する理解を深め、それらに対する違和感や苦手意識、さらには偏見を持つことなく、英語の母語話者および非母語話者との英語を用いた異文化間コミュニケーションに高い関心と意欲、そして自信を持ってこれを実践するようになることを目指す」という内容と密接に関わっている。世界の多くの人の共通語である英語と向き合う時、非母語話者の英語の発音、文法、シンタックス、そしてコミュニケーションスタイルといった判別しやすい差異や特徴に目や耳が向けられやすい。けれども、実際には、その特徴を生むことになった、英語学習者・使用者が置かれた環境、そしてその者たちを取り巻く社会と文化、そして政府による外国語を含む言語政策への知識や理解を深めることにより、発信された英語の部分的な特徴に気づくのみならず、英語のユーザーの包括的な理解に至ることができる。

世界の多様な英語やそのユーザーに関する知識を備えるということは、学生個人の英語運用能力の向上を目指し、多様な英語に対する理解力を向上させる訓練をするということに留まる話ではない。そのようなコミュニケーション力を目指すためには、世界諸英語理論、英語が国際化・多様化することになった背景、そして異文化間・多文化間コミュニケーション論などを避けて通ることはできない。海外研修Cの国内授業において、これらの内容に必ず触れるのにはそのような理由がある。

特に、海外研修Cが、中学校教諭一種（英語）および高等学校教諭一種（英語）免許の取得をめざす学生のための科目として有意義な学びを提供するためにも、英語運用能力の向上のみをめざした研修であってはならない。教壇に立ち、指導する生徒たちが、将来、英語を媒体としたコミュニケーションを図る相手の多様性を想定することができ、多様性のマネジメント力を備えつつも、教養ある日本人として、相手が誰であろうとも、ブレのない英語による発信ができるような指導力が、これからの中等教育の英語教育の現場には必要であると考えられるからである。

加えて、このような言語を通じて多様性に対応することのできる能力は、国外に出る場合のみならず、日本国内においてもますます必要とされるものである。英語教育や英語使用に関わる者に限らず、誰でも日常的に多様な人々と接し、交流し、協働する場面に関わる可能性がある。小さな子どもに関わる職業では、日本以外にルーツを持つ子どもたちのケアや、日本語がまったくわからないかもしれない保護者への対応の可能性、初等教育と中等教育では、特に義務教育のレベルにおいて、多様な子どもたちの受け入れがますます増加する。そのような状況の難しさの原因は、ことばの壁に限るわけではない、つまり、言語指導さえ実施すれば、すべてのコミュニケーションが円滑に進むわけ

ではないということはすでに明らかである。

海外研修Cにおけるスタディツアーの体験は、参加学生が今後、教員となることを目指しても目指さなくても、自身とは異なる環境に生きる子どもたちがいて、その子どもたちを育てている大人がいて、彼らを多角的に援助している日本人の団体が活動しているという現実を認識する機会となった。この経験が、今後、学生たちが多様な人々と遭遇する際の行動の選択に示唆を与えるものとなることを願いたい。

注

注1) QQ English は、オンライン英語レッスンを主な教育方法とし、カランメソッドによる指導を行う、日本人が経営するフィリピンの英会話学校。

引用文献

- 1) 海外研修C シラバス,
<https://passport.toyoeiwa.ac.jp/up/faces/up/km/pKms0804A.jsp?sanshoTblFlg=1&nendo=2022&jugyoCd=1069700>,
2023年9月1日.
- 2) 外務省、国・地域、フィリピン
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/data.html#section1>, 2023年9月4日.

参考文献

- 1) 小張順弘 (2018) 「フィリピンの英語」『世界の英語・私の英語—多文化共生社会をめざして』桐原書店、62-75頁.
- 2) 小張順弘 (2021) 「フィリピン英語と日本の英語教育」『アジア英語研究』第23号、4-28頁.
- 3) 竹下裕子 (2017) 「大学の授業にフィリピン人教員によるオンラインレッスンを導入する意義—実証実験より」『東洋英和女学院大学教職課程研究論集』第10号、44-58頁.
- 4) 竹下裕子 (2018) 「アジアの英語事情」『世界の英語・私の英語—多文化共生社会をめざして』桐原書店、29-40頁.
- 5) 竹下裕子 (2019) 「大学の授業にフィリピン人教員によるオンラインレッスンを導入する意義—本格導入を経て—」『東洋英和女学院大学教職課程研究年報』第11号、2-15頁.
- 6) 竹下裕子 (2022) 「コミュニケーションと文化理解」『国際コミュニケーションマネジメント入門』アスク出版、98-108頁.
- 7) 本名信行・竹下裕子編著 (2018) 『世界の英語・私の英語—多文化共生社会をめざして』桐原書店.
- 8) 本名信行・竹下裕子編著 (2023) 『新装版 世界の英語・私の英語—国際コミュニケーションのための世界諸英語を学ぶ』アスク出版.
- 9) NPO法人DAREDEMO HERO, <https://daredemohero.com/>, 2023年9月1日.

The Significance of Participating in a Study Tour Offered by a Non-Profit Organization: As Part of Study Abroad Program C

TAKESHITA, Yuko

Abstract

This is a discussion of an experience six students from Toyo Eiwa University had in the Philippines through their participation in a volunteer activity. This experience provided them with valuable learnings that go beyond the primary purpose of their Study Abroad Program C, which focused on improving English skills and understanding different varieties of English. The students had a unique opportunity to interact with “homeless” children in Cebu, which allowed for a meaningful cultural exchange, exposing them to different perspectives of life. Witnessing the poverty faced by Filipino children challenged the students’ preconceived notions about poverty and happiness. The students’ awareness of the importance of knowing by seeing highlights the value of empathy and understanding in a global context. This can serve as a foundation for building bridges between people from diverse backgrounds. The experience has the potential to cultivate a broader understanding of diversity, both within Japan and beyond. It prepares the students to navigate situations where individuals with different ideas and beliefs come into close contact, fostering tolerance and acceptance. Ultimately, the lessons learned from this experience can contribute to the students’ ability to manage situations involving people with varying perspectives. They can apply these skills not only in international contexts but also within their own country, helping to build a more inclusive and harmonious society.

Key words: Study Abroad Program C, Non-Profit Organization DAREDEMO HERO, study tour,
English, diversity management